

日本語教育実践研究（7）

—実践を通して学んだこと—

邵 雪飛

大学院の漢字実践で、生まれて初めて教壇に立って、外国語で外国人に外国語を教えました。正直とても怖かったです。内容はともかく、自分よりも日本語が上手な方が聞く側で自分の講義を聞いているので、プレッシャーが大きかったです。それにしても、この二回の機会を大事にして、自分が今後日本語先生になるためのいい練習にしたかったです。そして、二回の授業で、「類義語と反義語」「辞書の引き方」を内容にして、講義しました。以下、実践に対する自分への反省点です。

1. まず先生は教える側にいるので、授業内容への理解と把握を精密にしなければなりません。私はこの点において、まだ勉強不足であると思います。特に、「辞書の引き方」で、『漢字の書き方辞典』を紹介して、練習問題にしたのに、私の板書は筆順に問題がありました。「火」「鳥」など、一見簡単で、特に気にしないで書いたら、日本語の書き順に大きな違いがありました。そこで、同じ漢字であっても、同じ概念で理解するのが、大きな間違いだとさらに大きく感じました。私は知らず知らずのうち、日本の漢字を中国語として、使っていました。そこは日本語教師として、許されないところだと思います。特に今は日中両国の対照研究をしているので、日中両国の漢字の相違点を精密に把握しなければならないと思いました。日本の漢字は左から右へ書くという基本の書き準がありますが、左右を書いて、最後は真ん中というルールもあります。例えば「火」なら、「㇀」「㇀」「㇀」「㇀」の順で書かなければなりません。「鳥」の漢字もそうで、中国語の簡体字は画数を減らし、いかに簡単に書くかのために作った字なので、特に書く順には強調していないので、これは日本語を書くのに、中国人の大きな落とし穴となります。
2. 教師側に立っている所以、学生に安心感を与えて、教師に付いていて、勉強したいという気持ちを与えなければなりません。これも学習動機、学習興味などに繋がります。教師は導入部分で、学習項目を簡単に紹介する必要があります。学生にこれからの授業は何について勉強するのかを知らせる必要があります。それで、学生が自分の知識を動員して、自分なりの学習ストラテジーを作り出すからです。それに、導入はとても大事な部分なので、なるべく学生に興味を持たせて、興味津々に講義を聴けるように工夫しなければなりません。例えば先生は黒板で絵を書いたり、面白い諺から講義内容に入ったりすると、学生も興味を持って、積極的に講義内容を聞いていくようになります。

3. 教師は学生に知識を教えるだけではなく、自分の教えたことについて、何故こうなのかを知らなければなりません。例えば私は「類義語と反義語」の導入部分で「日本語の一大特徴は類義語が多い」という点を導入としました。この一言で、学生には「何故日本語には類義語が多いですか」という質問を持たせたかもしれません。学生は自然に日本語を自分の母語と比較して、自分の母語はそうでないのに、なぜ日本語はそうなのかを教師に質問するかもしれません。それも教師なら答える必要があると思いますので、内容以外には、沢山の知識を知る必要があると思います。

半年の実践で、沢山の勉強ができました。ほかの方の授業を聞いて、いいところを自分の授業へ持ち込んだりして、いいアドバイスをもらったりしています。まだまだ教師として、未熟な点が沢山ありますが、これからは精一杯がんばりたいと思います。

(ショウ セツヒ・日中言語文化対照研究室修士課程1年)